新型コロナウイルス感染症病棟における安全管理に関する研修
－リスク分析と対策の考察はメンタルケアにつながったか－

山　田　忠　則[1)]　　岡　　由　美[2)]　　高　橋　美千子[3)]

要旨：新型コロナウイルス感染症病棟の看護スタッフを対象に，感染リスクに対する安全の管理，メンタル面の援助を目的とした研修を行った．基本的な講義ののち，感染に関してとそのリスクの中で働くことによるストレスや不安に関して，実際にリスク分析と対策の列挙を行ってもらい，後日アンケートでその成果を確認した．ストレスや不安の軽減に役立ったという意見が多かった．研修ののち，研修でやったことを自ら実践したことこそがストレスや不安の軽減につながったと考えられた．

【はじめに】

中国武漢を端緒に世界中に拡大した新型コロナウイルス（以下COVID-19）感染症は，2020年2月には日本国内でも患者がみられるようになった．当初対岸の火事と考えていたが，当院でも3月には患者対応を迫られることになった．4月には重症化する患者も入院し，緊張感がぐっと増した．そのような中で，COVID-19感染症患者対応病棟（以下，感染症病棟）の看護スタッフの間には緊張と不安，危機感が広がり，強いストレスを抱えていくようになった．そこで感染に関する安全管理を今一度整理し，ストレスの緩和を目指した研修会を行ったので報告する．

【目　　的】

感染症病棟の看護師，看護助手を対象に，感染から身を守ることを目標とした研修を行った．感染症病棟で業務を行う際の安全管理に必要な知識，活動するうえでの考え方を学ぶことを目的とした．

1）岐阜赤十字病院　麻酔科
2）つるぎ町立半田病院　看護部
3）磐田市立総合病院　看護部

【方　　法】

研修は４月20日から30日までの間，不定期に病棟のラウンジでソーシャルディスタンスを保つよう少人数で行った．研修内容は，DMAT隊員養成研修の中で行われる「安全管理」のシミュレーションを参考にした[1)]．当院における感染対策と病棟運営を鑑みて，リスクの考え方，対応，対策の基本的な知識，考え方に関して講義し，最後に業務中のCOVID-19感染に関して，と業務に従事するうえでのメンタル面に関して，実際にリスク分析を自分たちで行ってもらい，そのリスクに関する対策を自分たちで考えてもらった．講義用資料は，DMATインストラクターであり，自院でCOVID-19感染患者の対応に従事する共著者の二人に協力を仰ぎ，作成した．一回の研修は６～７人程度とし，計５回行った．研修直後と研修から約１ヵ月後，政府の緊急事態宣言解除時を目安にアンケートを取り，その成果について考察した．

【結　　果】

研修で行った講義資料（図１），研修中の風景（図２），実際に行ってもらったリスク分析について（図３），示す．

研修直後のアンケート結果では回答のあった

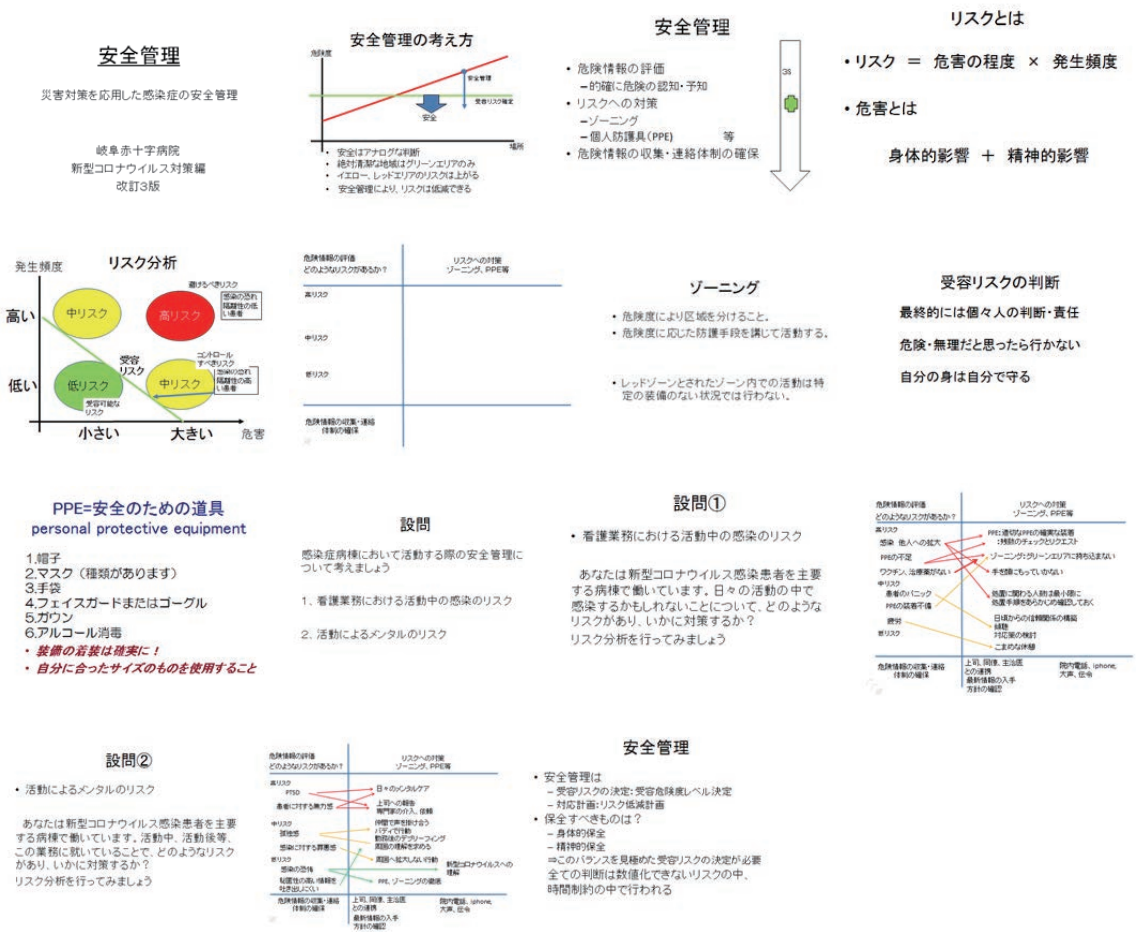

図１　研修資料一覧

17人中15人が感染症病棟での勤務に以前よりも強いストレスを感じていると回答した．また，回答した全員が研修は役に立った，と回答した．また一ヵ月後のアンケートでは，ゾーニングとPPEの重要性を改めて学んだ，仲間と不安な思いを共有し，自分が孤独でないこと，不安を吐き出せたことでメンタルをコントロールできた，といった意見が多く回答された（図４）．

【考　　察】

当院は，指定感染症受け入れ医療機関として，今回のCOVID-19感染症の蔓延に対し，当初から患者の受け入れを行ってきた．４月以降の感染拡大により入院患者が増加し，以前から用意していた感染者受け入れ病床だけでは対応できなくなってきたため，通常病棟のワンフロアを感染症病棟とすることになった．感染症病棟の看護師，看護助手は感染症認定看護師の指導の下，ゾーニング，PPEの使用方法，消毒の仕方等を指導されたのち，いわばぶっつけ本番で従事することになった．その数日後，前夜に入院したCOVID-19感染患者の呼吸状態が急激に悪化し，気管挿管をするため，著者がコールされた．まだCOVID-19そのものの情報の少ない中での処置に，大きなストレスを感じたことを今でも記憶している．同時に患者に直接接する職員の，メンタル面の負担が大きいことに気付いた．何らかの対策が必要と考え，病棟の看護師長らと相談し，今回の研修を企画した．

また，いわゆるコロナ禍における医療機関のマネージメントに関して，馬渡は，そのポイントの一つに，スタッフの安全の問題が挙げている．そして，スタッフの精神的疲労が最大の問題である，と述べている[2]北九州でのCOVID-19による病院クラスター発生に対応し，また令

図２　研修風景

和２年７月の熊本豪雨災害に際しCOVID-19感染に気を配りつつ災害対応を行った馬渡の経験から発せられたものと思われる．更には，日本赤十字社医療センターの調査によれば4から５月の段階でCOVID-19感染患者に対応した職員の約３割がうつ状態であったと発表された．同様の報道は中国やカナダからも発信されている．研修開催のタイミングとしては時宜を得たものと考える．

一方で，DMAT隊員養成研修ではリスクや安全管理の考え方，対策としてのゾーニング，PPEを講義し，被災地での活動に際し，自らそのリスクを分析し，対策を用意することで自分の身は自分で守る，という教育をしている．そして，こうしたことを通じて，活動面における不安の除去を図っている．これらは，ダイヤモンドプリンセス号におけるDMAT活動でも有用性が報告されている[1]．そのため今回の研修に，DMAT隊員養成研修の「安全管理」の内容を応用することを考えた．資料作成には，看護師の視点の必要性を感じ，共著者らに協力してもらった．両名とも，自院で，COVID-19感染患者受け入れの対策を主導し，先頭で受け入れを取り仕切る立場であり，まさに適任であったと当時も今も信じている．

この研修を行っていく中で気づいたことは，感染症病棟で働く看護スタッフ全員が漠然とした不安やストレスを感じながら仕事に従事しており，そしてその多くは，正しい情報の不足と日常生活での不安の吐露と共有の場がないことに起因している，ということであった．解決方法は，自主的な何らかの行動であり，その中でストレスや不安の軽減を図るより達成されることはなく，それ以上の自らのコントロールではなんともできない強いストレスは，専門家に繋いで治療していくより方法はない．研修から約

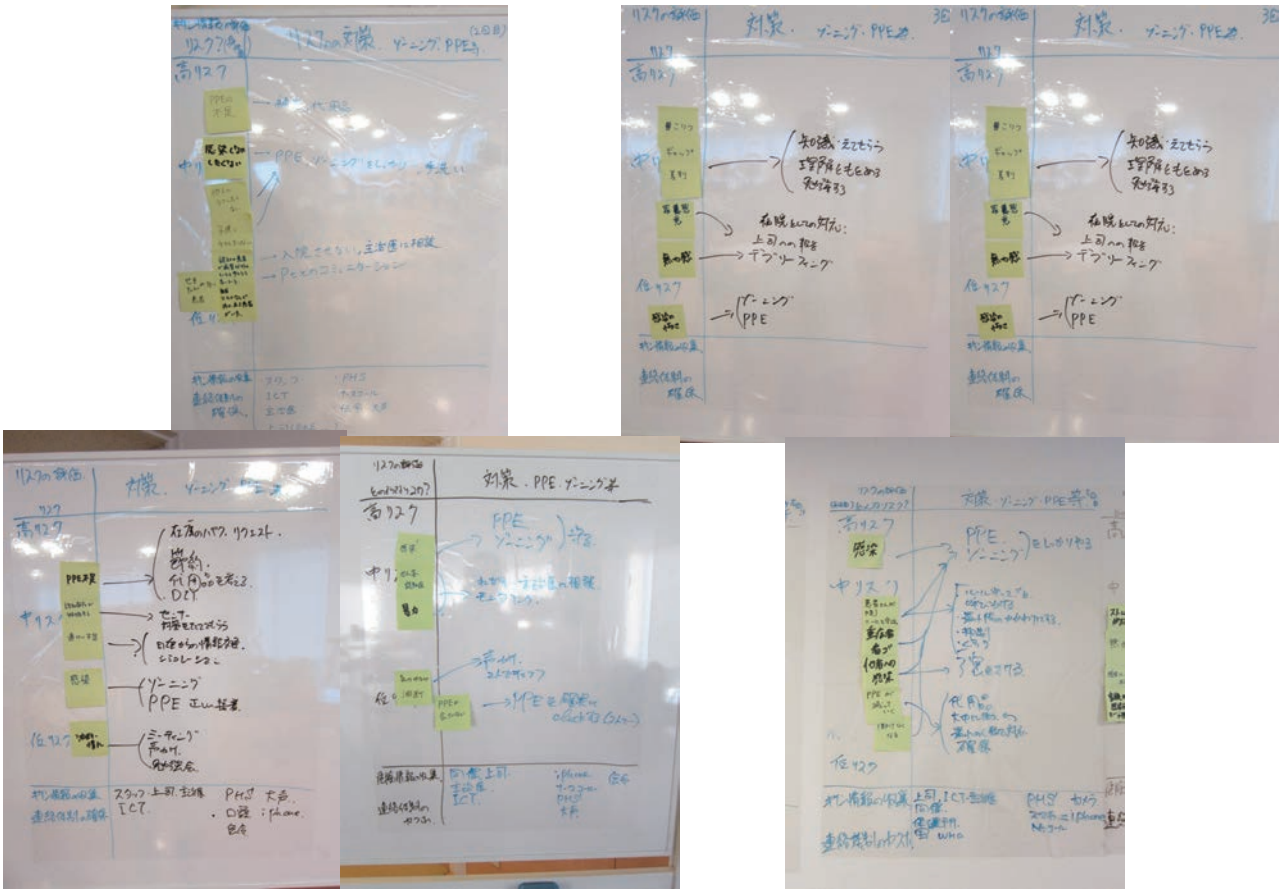

図３　リスク分析の結果
左側は感染のリスクについて、右側はメンタル面のリスクについて

アンケート結果（回答17名）

- 研修直後

コロナ禍以前の勤務よりストレスを強く感じると回答　･･･15名
役にたった、と回答･･･17名

- 研修終了約1か月後の意見（抜粋）

研修により、自分だけが不安やストレスを感じているわけでないと知った。
･･･6名
スタッフと相談や話をすることで不安やストレスを軽減できた･･･8名

PPEやゾーニングの大切さが改めて理解できた･･･4名
正しい知識を得ることで不安が軽減した･･･3名
自分なりのストレス発散を意識した･･･1名

図４　アンケート結果

一か月後のアンケートの中で，研修後，不安が軽減した，という意見があったのは，研修を行った後に，自分たちで自ら考えたリスク分析とその対策を日々実践したこと，すなわち毎日情報を収集，共有し，仲間との間で経験や思いを語り合っていった結果であると思われた．今回の研修の意義は，今後のCOVID-19と戦ううえでの考え方を示したことにある，と考えられる．感染に関するリスク，メンタル面の問題や不安をリスク分析によって具体化し，自ら対策を考え，行動に移していったことで，リスクや不安が整理され，結果的にメンタルのケアにつながったと考えられる．

【おわりに】

COVID-19に対応する病棟看護師，看護助手を対象に，感染に関する安全管理に関しての研修を行った．感染を避けるためのゾーニング，PPEの重要性といった知識と共に，様々なリスクを分析し対策を考えることで，漠然とした恐怖や不安が整理でき，結果としてメンタル面のケアにもつなげることができたと思われた．

【参考文献】

1）厚生労働省DMAT事務局ホームページ：www.dmat.jp
2）馬渡博志：“大規模災害withコロナ”と医療　医療機関のリスクマネジメントをどう見直すか．保険診療　75(9)：39-45，2020